

ウルリム
響

星 環

特定非営利活動法人

聖公会生野センター機関誌

第 47 号

2008 年 6 月 20 日発行

題字：康秀峰

URL <http://www.nskk.org/province/ikuno>

E-mail: ikuno@nskk.org

過去は死なない

香山洋人

ここ数年「アジアのキリスト教」という授業を担当している。タイトルは大げさだが、中身は朝鮮キリスト教史概説と「民衆神学」などアジアの神学のような内容だ。もともと歴史は苦手だったが取り組んでみるとおもしろい。特に最近、日本や朝鮮の近代史に関するいい本がたくさん出ている。させられる勉強はつまらないが好きなことはたとえしんどくてもやめられないものだ。

歴史は人間を魅了する。最近の歴史バラエティ番組を見ても明らかだ。しかも、遠い昔の話となると好奇心と知識欲に加え、誰かにうんちくを語りたい誘惑も手伝って興味が湧く。けれども日本と朝鮮の歴史には、好奇心や興味という言葉では言い表せない何かがある。そこにはバラエティ番組には収まらない真摯さの要求があるのではないだろうか。そんなことを言っているから近代史は敬遠される、と人はいうだろう。確かにそうでもあるだろう。けれども、もともと歴史好きで

はない私が今になって歴史を学んでいるのは、自分の身の回りに明らかに存在する「過去からつながる暴力と差別の伝統」をひしひしとを感じるからであり、その正体を見極



めその伝統を断ち切るために、好き嫌いにかかわらず歴史を学ぶことがどうしても避けられない作業だと気づいたからだ。

過去のイメージは語ることによってではなく、沈黙によっても形作られている。過ぎ去ったはずのものが驚くほど鮮やかに今の自分たちの中に生き、影響力を発揮する。語ることによって、そして語らないことによってその力は今も発揮され続けている。このように述べるテッサ・モーリス・スズキは、だから我々には歴史に対する真摯さと注意深さが大切だという（『過去は死なない』岩波書店）。

書店）。

真摯であること、注意深くあること。つまりこれは今を誠実に生きることには違いない。もちろん何よりこれが難しい。しかしそれが何より自由な生き方であることもわかっている。誠実に歩んでいきたい。それぞれの現場で一步一步、誠実な歩みを続ける人々に励まされながら。

（かやま ひろと 立教大学チャプレン）

も く じ

過去は死なない /1

時のしるし「真理を渴望し、義に飢え渴く——大韓聖公会聖職按手式に参加して」/2

多民族・多文化共生のすすめ 橋下知事は、強大な権限を持つ国とこそ戦え！/3

ハルモニたちとの済州島四三事件の旅/4

共に歩もう平和への道/5

写真 聖公会生野センター フォトギャラリー/6・7

韓国からのお便り ノガタ・シマイ/8・9

こんな本あります 堤未果『ルポ 貧困大国アメリカ』/10

詩『ハルモニの物語（イヤギ）』/11

編集委員リレーエッセイ・余韻/12

5月下旬、大韓聖公会ソウル大聖堂で行われた聖職按手式に2度も参加する機会が与えられた。わたしにとっては15年ぶりの韓国訪問である。

5月22日(木)は旧知の金根祥神父の主教按手式(韓国では「叙品式」)。日本からはすべての現職主教をはじめ30人以上が出席した。来年1月、正式にソウル教区第5代主教に就任される。新主教はいわゆる社会宣教を推進してこられた方のひとりであるが、夜の祝賀レセプションで第3代丁哲範^{キムグンサン}主教が温かく「活動が成果主義に陥ってはならない。霊的生活が大切であって、それを失えば教会の意味がなくなってしまう」と言われたのが強く印象に残った。

按手式の中で奉献の第2聖歌として歌われたものが印象的だった。大韓聖公会聖歌487。作曲は羅運榮^{ナウニョン}。自由という言葉にひかれた。訳してみると――

1. 真理がわたしたちを自由にします
愛がわたしたちの心を広くします
(おりかえし)
愛の主なる神、栄光の主なる神
自由になってください 愛させてください
2. 信仰がわたしたちをひとつにします
聖霊がわたしたちを新たに生まれさせます。
(おりかえし)
3. 希望がわたしたちを光とさせます
み言葉がわたしたちを塩とさせます。
(おりかえし)
4. 真理のみ言葉が自由にします
愛のみ言葉が甲斐あるようにします
(おりかえし)

翌週、ソウル教区から京都教区に派遣されている京都聖ヨハネ教会の韓相敦^{ハンサンドン}執事の司祭按手式参加のため訪韓した。今回は京都教区からの25名の訪問団の一員である。式の始め、わたしは推薦の言葉を述べた。その後、「叙品式連祷」(聖職按手のための嘆願)が献げられた。その間、司祭候補者8名、副祭(執事)候補者4名は白衣を着て床に伏していた。以下は連祷の先唱一部である。

真理を渴望し、義に飢え渴く――大韓聖公会聖職按手式に参加して

井田 泉

主よ、わたしたちの主教(フランシス)とすべての主教、司祭、副祭(執事)たちを主の愛によって満たし、真理を渴望し、義に飢え渴く者としてください

主よ、教会のために召しを受けた聖職者たちのために祈ります。彼らが聖なる務めを忠実に遂行し、教会を打ち立て、主のみ名を聖とするようにしてください

主よ、聖霊が彼らの心におられるゆえに、彼らが助けと力を得て、最後まで耐え忍ぶことができるようにしてください

主の愛、真理への渴望、義への飢え渴き――聖職のありようがこのような言葉で表現されている。何度か思われるのは、韓国聖公会の式文が、神と人と世界に対して極めて率直な姿勢と言葉でつくられていることである。

これは韓国の教会が、社会の困難と苦しみ直面しながら切に祈り取り組んできたことの反映ではないだろうか。

ソウル大聖堂構内には「殉教追慕碑」があり、「6月民主抗争震源地」の碑がある。前者の碑には、かつての平壤の総司祭・李源昶^{イウォンチャン}神父(金根祥主教の祖父)ほか1950年に勃発した朝鮮戦争で殉教した人々の名前が刻まれている。後者はこの場所が、1987年、長年の軍政に終止符を打ち、民主化の実現をもたらした「6月民衆抗争」の始まりの地であることを示すものである。当時、機動隊がソウル大聖堂に乱入、主教館の一部を破壊し、また主任司祭・朴鍾基^{パクジョンギ}神父を殴打して負傷させるという事件があった。聖職団はソウル大聖堂に1週間こもって断食し、政府に「聖域侵犯」への謝罪を求め、またそのような社会と政治のありように許した自分たちの罪を悔い改める祈りをささげた。

こうした歴史の中で現在の韓国聖公会が生きていることを思う。日韓の教会の交流がこれくらいっそう豊かで意味深いものとなることを心から願う。

(いだ いずみ 京都聖三一教会牧師)

橋下知事は、強大な権限を持つ国とこそ戦え！

金光敏

橋下徹大阪府知事が庁内に設けた改革PTが、大胆な歳出削減をめざす財政再建プログラム試案を発表し、その取扱いに今議論は沸騰している。この試案をめぐる様々な人々が府政のあるべき姿について熱い議論を交わしている。橋下知事誕生の効果と言えばそうだと云える。

選挙権がないので、私たち外国籍府民は橋下府政誕生に関わっていない。だからある意味、今回の議論にも距離を置き眺めることができる。そんな立場であえて大阪府政のあり方について考えたい。

今回、大阪府の改革PTが示した財政再建プログラム試案は、これまで指摘されつつも手がつけれなかった府立施設の整理や公共事業の見直しなど、聖域を認めず切り込もうという点で注目されており、大阪府の財政状態を考えれば、財政再建そのものを否定することは難しい。

ただ、橋下知事は、財政再建の前提となる府政失敗の原因究明についてどの程度本気で行うつもりなのか、示していない。現職知事が歴代知事の責任に言及することは難しいことであろうし、同時に一部会派を除いてオール与党体制で進められてきた大阪府議会の責任についても橋下知事はどこまでやりきれるか、未知数だ。

府財政の悪化原因のひとつに大型の公共投資の失敗がある。財政再建の必要性について触れた府政だより4月号では、阪南スカイタウンやりんくうタウンなどの巨額の公共投資の失敗についてまったく触れられておらず、違和感を持った人も少なくないだろう。府財政を大きく圧迫したそれらの泡沫事業に、歴代知事や府議会がどのように負うべき責任があるのか、橋下知事が明確にしなければ、また再び大阪府政が同じ過ちを繰り返さないとは誰も言えない。

橋下知事は、府政改革のビジョンを示せていないとして批判も強い。橋下知事自身も「金のない中でビジョンは示せない」と語り、民間企業の例を出しながら、1100億円に及ぶ巨額の歳出削減を優先し、それに集中したいと説明している。

決意の強さはいいと思う。医療や福祉、警察分野の予算削減は思い留まったようであるが、そもそも大阪府が広域自治体として何を担うのか、あるいはめざす公共とはどんなものであるのかを示すことなく、まず予算削減ありきで議論を進めると、行政と府民との間の不信感を煽るだけで、少なくとも、府民の痛みが一時的なものか、それとも永続的なものか、やはり改革の全体像を示すことなく、単年度レベルの予算議論から入るやり方は短絡的すぎないか。改革のビジョンをまず示してほしいと求める人々に橋下知事が激しい口調で反論する場面が報道されていたが、政治指導者の姿ではない。

橋下知事は、権限を大幅に市町村に移し、市町村への補助金も交付金化をめざすとしている。市町村への権限と財源の委譲は、まさに広域自治体改革の本丸だ。橋下府政がそうした改革に取り組むことは歓迎したい。ただ、改革の本丸は早晩、国の膠着した中央集権体制の高い壁とぶつかる。減員対象となり議論を呼んでいる教員の定数についても、大阪府が虚勢を張って単独予算で加配してきたというより、そもそも国基準が低いところに問題がある。また、国主導のばら撒き型の景気対策に引きずられて、大阪府が負債を増やした点も忘れてはならない。

税収配分の国と地方自治体との不均衡を是正しないまま、府から市町村への分権と言えど内実は伴わない。まさに橋下府政に求められているのはそうした分権モデルである。

橋下知事は大阪府庁株式会社の社長ではなく、外国籍府民を含む880万人の行政の長である。府民にメディアを通じて我慢を呼びかけるだけではことは足りない。橋下知事には強大な権限を持つ国と一戦を交えてでも改革を遂げてほしいとしたからだ。まさか身内の市町村を抵抗勢力に仕立て上げ、それと戦う姿を醸し出して改革派知事のイメージにしようとは府民の誰が想定したであろうか。橋下知事は本当に強い相手と戦ってほしい。(きむ くあんみん コリア NGO センター事務局長)

ハルモニたちとの済州島四・三事件の旅

磯野太郎



4月3日に済州島で行われた60周年記念慰霊祭

のりばんでは、よく喋る人、人の話を聴かない人、言い方がきつい人等々、殆どの人が自己主張ばかりしますが、発した声や言葉の激しさに対して、本当に伝えたいこと、その人の心根とは必ずしも一致しません。

韓国ドラマを観ていたら、乙女のように泣いたり笑ったりしますし、80歳代の方を、さり気なく70歳代の方が気遣ったり敬ったりしている場面を垣間見ます。

喧嘩腰に聞こえる彼女たちの言葉。そんなとき感じるのは、もって生まれた性格や人柄そのままでは生きぬく事が困難で許されない環境だったのだろうということです。その原因が、時代なのか、貧困なのか、人間の本質なのか、私は知りません。何故なら当の本人であるハルモニたちが、その原因を語らないからです。

「・・・が怖かった、・・・だったから苦労した」、と過酷な戦争体験や普通に生活することが出来なかった経験を聴かせてくれたことが幾度ありましたが、何かに、誰かに対しての恨みつらみを、耳にした事はありません。

のりばんに、テレビや新聞などの取材が来たときでさえ、あるハルモニが過去を口にし、質問に应对しますが、大変だった体験談だけを話しています。

そんな私が4月の初旬に体験することになった

のは、済州道庁が招致した済州島四・三事件の被害者及び被害者遺族と済州島へ同行することでした。

行くまでは、ハルモニたちのおそらく最初で最後の旅行だし、高級ホテルに泊まると聞いていたので、おもしろそうだなあと楽観的に浮かれています。

ところが、関西空港から大変でした。のりばんの15人のハルモニたちはそれぞれに歩く速度が違います。それは当たり前のことですが、その差が兎と亀ほどもあり、中にはハムスターのように右へ左へチョロチョロ動き回る人もいて、迷子がないように逐一点呼をして人数確認を行なって、皆を把握しきるのは大変でした。

食事のときも普段と変わらず物凄い食欲で、「こっちのテーブルの肉少ないで!」「なんでそっちばかりサンチュあんの?」とか、昼間から「ビールもっと持ってきて一な!」と、旅の疲れなど微塵もないようでした。

そんなハルモニたちにときには感謝されたり、優しい言葉をかけられたりします。すると何故だか自然に「いいえ、僕のほうこそありがとうございます」って、いつも頭を湧いてきます。

ホテルのホールで、参加者や取材陣が一堂に会し、代表挨拶やら活動内容が発表され、その後、主役であるハルモニたちの体験談が続きました。体験談は韓国語でしたので、内容は理解できませんでした。

ただ、内容は理解できなくても、語る側と聴く側の表情だけで、今このホールに居る皆の根幹に関わることが話されているのだと判断できました。数人にマイクが回った頃、隣に座るハルモニが泣いたのです。「申し訳ない。死んでいった人たちに申し訳ない。私だけが生き残ってしまって・・・」。両の掌で顔を覆い、肩を小さく揺らしながら嗚咽の隙間に呟くハルモニ。私は目の前の状況に戸惑いながらも、今を忘れたくないと強く感じて、声をかけず、ハンカチも差し出さず、ただ見守りました。

つづきは8ページへ。

共に歩もう平和への道

伊藤美佐子

んだらうかと思う。

【第二部】

民俗クッ「共に歩もう平和への道」

李政美さんの「故郷の春～京成線～アリラン」の歌で始まった。白い衣装の李政美さんの歌声は、透明感があり、物悲しく心に沁みだ。

突然、連れて行かれ、帰って来ることがなかった父、兄に語りかける「詩「歳月」」の朗読は目頭が熱くなり、涙がこぼれそうになった。

プログラムに「民俗クッ」のことが記されている。「クッ」とは、韓国のシャーマン（シンバン）による巫俗儀礼のこと。

本作品は済州島の方言による演劇、歌、演奏と本来は宗教的な儀礼であるクッが結びつき、芸術公演であると同時に慰霊の儀式でもある。このような公演形式を「民俗劇」ではなく、あえて「民俗クッ」と呼ぶことにした。民俗クッによって、四・三でひととも言わずに死んでいったすべての死者を慰め、今を生きる私たちの胸に積もったしこりも解くことができれば幸いである。

死者の魂を慰霊する音楽・踊りに続き、会場の人々が、次々とステージにあがり祭壇に祈りをささげ、踊りながら幕が下りた。

金石範氏の話、初めて見た民俗クッはどちらも心に残った。友と「今夜は来て本当によかった」と話しながら帰途についた。

聖公会生野センターの在日コリアン高齢者の食事サービス「のりばん」では、オモニたちは済州島のすばらしさ（きれいな景色・美味しい食べ物）を語る。その話の中から済州島四・三事件が、点であったこと（武装蜂起・無差別虐殺・密航・漢拏山等）が線として、少しずつ繋がってきている。済州島は、今生きる私たちに訴えている。過去の歴史を忘れてはいけなと、それを、自分で感じるために、是非、済州島に行きたい。

「済州四・三」（著者：許^ホ榮^{ヨン}善^{ソン}）に次のように記されている。

2008年4月19日（土）クレオ大阪中央大ホールにて、済州島四・三事件60周年「共に歩もう平和への道」が行われた。済州島からの参加もあり約1,000人が集まり、開演前から熱い熱気で包まれた。

【第一部】

作家の金石範氏に「済州島四・三事件の今」を聞いた。聞き手は高正子さん。

私には「火山島」の作家金石範の話を知りたいという強い思いがあり、楽しみにしていた。金石範は「記憶の他殺」ということばを使い、「済州島では、四・三事件はタブーとして歴史の闇に葬られ、一切の記憶が抹殺されてきた。記憶のないところに人間は存在せず、歴史はない。見てはならぬ、口を開いて話してはならぬ、耳で聞いてはならぬ。外部からの恐ろしい国家権力による記憶の他殺。権力に対する恐怖から島民自身による記憶の自殺。抹殺された記憶は内へと深く無意識の世界に沈みこんで、やがて忘却になり、死に近い沈黙に至る。悲しみを悲しみとし、喜びを喜びとして表現する自由は、基本的な人権意識以前の人間存在の自然的条件である。」と語り、また、「四・三の解放は終わっていない。背負った苦難を忘れないで次世代が語り継ぐ必要がある。」と語った。身近な人が突然姿を消し、いのちを奪われたことを、誰にも話せなかったし、誰にも聞いてもらうことができなかった。今は、悲しみを悲しみとし、喜びを喜びとして表現する自由があるはずだが、現実はどうな



犠牲者の鎮魂の舞を踊る済州島からの芸術団

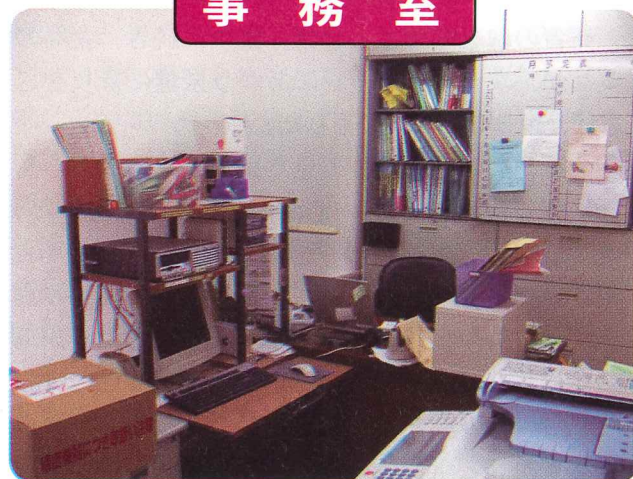
つづきは8ページへ。

聖公会生野センター

センター外観



事務室



事務所：専用の事務所が与えられました。

会議室



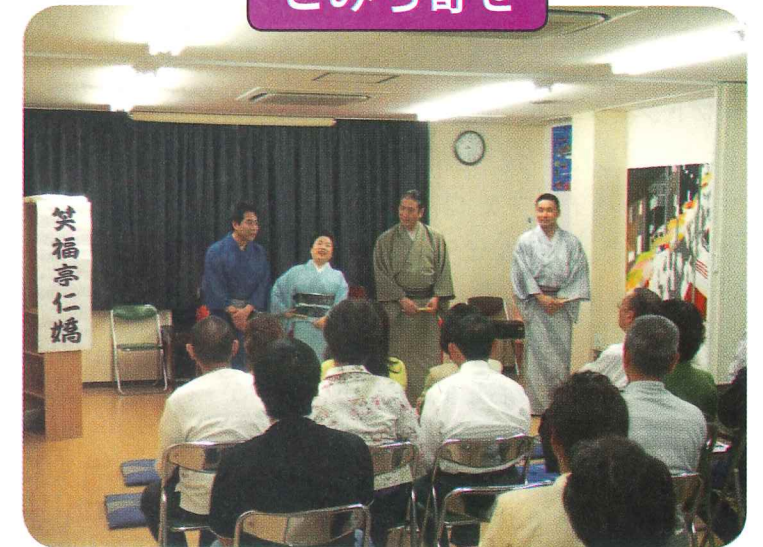
会議室：会議や少人数の集まりに使用します。

フォト ギャラリー

= 移転後の

館内の様子 =

こみち寄せ



移転後1回目のこみち寄席。
記念に大喜利をしました。

のりばん



広々とした1階で楽しく過ごせます。
利用者も増えました。

クリンもだん



デンマークからしょうがい者美術に取り組んでいるピアさんが訪問。楽しい一時を持ちました。

ノガタ・シマイ

中村 香

ザブトン、タライ、チュメキリ（つめきり）、ヨジ（つまようじ）、などの生活用品から、マントン（満タン）、イッパイ、ワク（杵）、ユドリ（ゆとり）、シダ（下っ端）、ウヤムヤ（有耶無耶）、ショブ（勝負）等々、現在の韓国語には様々な日本語が登場する。日帝時代、名残りの日本語である。

その中に“シマイ”（おしまい）というのがあって、なんでそんな日本語が残ったのかと韓国に留学した5年前から常々疑問に思っていた。韓国人に聞いたら“ノガタ”（土方）で使う言葉だと言う。

話は変わるが、引越しをした。去年の4月にはソウルからアサンという田舎に帰農し、農家の韓国人にとにかく言われながらめっちゃくちゃな農業を営んだわけだが、一ヵ月20万ウォン（約2万5千円）の家賃に到底追いつけず（韓国の田舎としては激高の家賃であるのですぞ!）、引越し先を探

したところ私たちの帰農のきっかけとなった車牧師の「ワ（来い）」で、陰城行きが決まった。そうして苦難の修復工事&増築工事が始まったのである。

車牧師^{チマ}所有の土地に、新築なのに3年間放置された瞑想の家、フクチプ（土の家）があった。関心のある素人たちが寄り集まって建てたという、昔ながらの土の家である。しかしながら素人が建てただけあって、住める状態では無い。建てかけ、という感じで家は隙間だらけ、オンドル（床暖房）を使おうとかまどで火を焚いても（床下を煙が通って床を暖める）、家の中は煙でもくもく、第一床が暖かくなならない。当初は台所と浴室の増築工事、予定15日間のつもりが、土の家の修復工事、オンドルの再築のため、結果的に60日間にわたり、知り合いの家の住み込みと家との往復生活が2ヵ月

4ページより、つづき

僕は嘆きました「こんなに悲しいことはない」。親兄弟親戚を殺されても必死に生き、差別や不当な扱いを受けながらも一生懸命に家族を築き守り、子を産み育ててきた人間たちが、自分が生きていることを「申し訳ない」と言う。

済州島四・三事件の詳細を私は知らない。だけど、どれほど悲惨な事件だったのかは、その日のハルモニを思い出せば容易に感じ取れるのです。

帰国して、またいつもの通りにのりばんに集う人生の先輩たち。今を精一杯楽しもうと心掛けている皆さんの手助けをすること、それが僕の仕事だと考えています。

失礼になるかもしれませんが、私自身が出来なかった祖母さん孝行、母親孝行の代わりに、ハルモニ孝行をさせてもらっています。

（いその たろう のりばんスタッフ）

5ページより、つづき

四・三は語る。
歴史の真実とは、
閉じ込めようとして閉じ込められるものではないことを。

そして歴史は
未来のためにあることを。
人間の歴史は続き、
人生は続く。
そうであると
私は信じる。
互いが互いに
加えた傷は
明らかにされなければならず、
そのむき出しになった傷は
太陽の光でばんばんに乾かすことで
きれいに消毒される。

それでこそまた新しい皮膚が浮き出るのだから。
（いとう みさこ 京都教区 ウルリム編集委員）

も続き、かおりとさんじゅんの試練の時期となった（土の家についてはいつか詳しく述べたいと思う）。引越した今も工事は終わっていない。

来る日も来る日もノガタ（土方）。朝からシャベルでほいさほいさとセメントを作る毎日（ちなみに学生時代、教会でのワークキャンプの成果がかなり発揮された）。ノガタしたあとには、“女の仕事”と言われる料理、皿洗い、掃除が待っている。他人の家だから気も遣うし、色んなストレスと男性社会への不満が毎晩爆発した。毎日フラフラでボタンキューしても、朝の3時に鶏が横から「コックオー」と鳴くのであった。

村の棟梁と工事をする中で、沢山の日本語が登場した。棟梁は日帝時代に日本語を習ったと言って、懐かしそうに単語単語で日本語を使った。ノガタから始まる建築用語には、キソ（基礎）、テモド（手元）、テナオシ（手直し）、ネジ（目地）、テンジョウ（天井）、などがある。棟梁は言った。「日帝時代、韓国で最っ大の工事が行われたからなあ。」と。その瞬間、日帝時代、日本で、韓国で、外国で働かされた人々と、韓国での最っ大の工事を想像して、頭がグルグルになってふらふらした。建築用語が残ったのにはこういう意味があったのだ。

村には私の知る限り、3人の日本語を喋られるハルモニ（おばあさん）ハラボジ（おじいさん）がいる。ハルモニは日本育ちで戦争が終わって韓国に戻られたので、日本語がとてもうまい。いつも良くしてくれる。もう一人は教会のハラボジで、日本に本社を持つ韓国の支社で記者をしていた時に日本語を習ったらしい。いきなり、「歴史好きですか。織田信長、明智光秀知ってる？本貸します。」と日本語で話してくれたが、出てきた日本人の名前にギョッとして、「ははあ!」と変な答え方をしてしまった。最後の一人は村のハラボジで、日帝時代に学校で日本語を習ったという。会う度に「キョウナニスル」話しかけてくれるのだが、片言のきつい日本語で、教会の人たちと共同苗床の作業をしているときに遊びに来て、冗談で「バガヤロ」などと言い、私の所に来ては「ハヤクハタラク」と宇宙人のように命令するので、なぜか私もペコ

ペコしながら「スミマセン、スミマセン」と必死に働くのであった。そんなハラボジではあるが、この前道で会った時、「コッチキナサイ」と叫んだあと、いきなり私の顔をまじまじと見ながら、「ムスメナカナカ、キレイデアルヨ」と言うので、「ブハッ!!!」と思わずふきだしてしまった。

また私の家のすぐ裏に、土が崩れて閉鎖されているが、日帝時代に作られた金鉱がある。こんな、こんな誰も知らないような村の小さな山にまで日本軍が、日本人が来ていたのかと思うと、今ここに自分という日本人がいて不思議ではない。なぜ私はこの地に辿り着いたのであろうか。とにかく、日本の何かに出会うたびに私は日帝時代、韓国と日本の歴史を思い、ハルモニハラボジを想う。それが日本人の定めであるかのように。それが私の責任であるかのように。

かくして私たちは工事費はかかったものの、ここでの無料永住権&家を得、畑も貸してもらい、また新しく農業生活を送ることとなったのであった。

最後に、大韓聖公会ソウル教区主教按手があり、久しぶりにソウルに行った。日本からのお客さんは約50名、沢山の日本の方たちと会い、励ましてもらい、元気をもらい、外国に住んでいる私としては本当に本当に、楽しく嬉しい時間だった。客人の宿泊はソウル市庁のまん前にあるホテル。ホテルの窓下にはソウル市庁と芝生と噴水の広場が見えた。連日イベントが開催され、歌やら踊りやらで非常に賑やかであった。

そこから徒歩5分の清溪川^{チョンゲチョン}では米韓自由貿易協定—FTAの反対運動の一つである米国産牛肉輸入反対運動がこれまた連日行われており、子どもから大人まで、警察に囲まれながらロウソクを片手に声を張り上げデモを行っていた（休日には10万人以上が参加）。ホテルの窓下だけでは何も分らないところだった。その内容や質はともかく、やはり韓国はいいなと思う貴重な瞬間ではあった。

（なかむら かおり 韓国在住）

堤 末 果『ルポ 貧困大国アメリカ』（岩波新書）

磯 貝 治 良

アメリカといえば、経済・軍事・政治の3点セットで世界を制覇する、超大国のイメージがある。事実、そうなのだが、超ムジュン大国でもある。とくに経済のムジュンは、サブプライム問題が世界の金融市場を席卷する以前から語られていた。

格差社会が産み出すワーキングプアーと「弱者」切捨ての政治。貧困層が背負わされる戦場。それらはバラバラに在るのではなく、ブッシュ政権のもとで「罪なき囚人」をつなぐ鉄鎖のように連鎖し、抜けられない歯車に巻き込む。

この本はルポルタージュの形をとることによって、その実態をとともわかりやすくあぶり出す。証言を実証するデータも過不足なく付されている。プロローグとエピローグのあいだに構成された5つの章は、次のような表題になっている。

第1章 貧困が生み出す肥満国民

第2章 民営化による国内難民と自由化による経済難民

第3章 一度の病気で貧困層に転落する人々

新自由主義の経済政策の下、「中流家庭」は崩壊し、貧困層に転落する。そして貧困層の児童たちに不健康肥満児が多い。光熱費を払えず調理が出来ないの、支給されたフードスタンプでマクドナルドなどに頼るからだ。

ニューオーリンズを中心に襲ったカトリナ・ハリケーン。貧困地域は再建されることなく「削除」された。「民営化」によって国家が救済策を放棄して被災者を難民化したからだ。民営化は学校にも及び、「自由競争」が貧困層を経済難民に追いやっている。

医療の分野でも民営化と市場原理によって、利益優先の保険会社が支配し、病院が株式会社化する。高い医療費を払えない患者が見捨てられるばかりか、医師も病院もふるいにかけられる。そうして出口をふさがれた貧しい人々が戦争を担わさ

れることになる。

第4章 出口をふさがれる若者たち

第5章 世界中のワーキングプアーが支える「民営化された戦争」

この本の読みどころは第4章と第5章だろう。

ブッシュ政権が「テロとの戦い」を標榜してイラクを侵略したとき、わたしたちが米兵のほとんどこに見出したのは、移民系非アメリカ人だった。彼らの「志願」が貧困と結びついていることは理解できても、大学に進むため、あるいはアメリカ国家のライセンスを得るために止むに止まれぬ通過儀礼として捉える見方が大方だった。

それはその通りだが、筆者は実に多くの目からウロコの実態を知った。どのようにして彼らは入隊するのか。たとえば高校で実施されている「落ちこぼれゼロ法」という裏口徴兵政策による選別と個人情報の収集。大学生を襲う学資ローンの罠。民間戦争請負会社の仕組み（副大統領チェイニーはかつて請負組織の頂点にあるハリバートン社の最高経営責任者だった）、「傭兵」募集の実態。実際に戦争行動に参加する「民間兵」。多くの外国「兵」の存在。

一読して筆者が思ったのは、いま日本で進行している事態は、ブッシュ政権が進めている国家づくりのミニチュアであるということ。生徒と教員の選別を目的とした全国一斉テスト、医療と保険の民間資本化、有事を想定した「国民保護法」にみられる監視体制などなど。

その類似は日米同盟のもう一つの実相を示している。格差社会やワーキングプアーの問題に日本の政治権力がまったく無策なのは、実は若い生活困窮者を自衛隊に誘導するための“高度に政治的な政策”なのかもしれない。

（いそがい じろう 在日朝鮮人作家を読む会代表）

ハルモニの物語^{イヤギ}

丁 章

きかせてほしい
ハルモニのことを。
ハラボジはなにも語らずに
逝ってしまった。
あなたが語らねば
海の向こうのはらからの地から
わたしたちはぶつとりと切れてしまう。
わたしたちがここにいる原因
ハルモニの苦勞と
ハルモニのロマンスを。

傷深いその苦しみが
あなたに語らせまいとして
あなたの朝鮮を
あなたは密封してしまっている。

わたしたちはききたい
ハルモニの物語^{イヤギ}。
見たことがない
祖国と歴史に
わたしたちを
つなげてほしい

ハルモニ——할머니。祖母、おばあちゃん
ハラボジ——할아버지。祖父、おじいちゃん

丁 章（ちょん・ちゃん）

1968年、京都市にて出生

大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業

現在、大阪府東大阪市在住

著書

詩集『民族と人間とサラム』（新幹社）

詩集『マウムソリ 一心の声ー』（新幹社）

詩集『闊歩する在日』（新幹社）

呉 光 現

ある日、生野区役所から電話があった「韓国^{ボチヨン}の京畿道の抱川市から聖公会生野センターに行きたいという人が来ていますが・・・」。電話を替わって翌日ののりばんに来てもらうことになった。聞くと行政のボランティア支援部の人たちでインターネットで聖公会生野センターを見て、訪問したいとのこと。

訪問者は主にボランティア担当の若い公務員4名。のりばんに来て楽しい一時をハルモニたちと過ごした。2年前に大韓聖公会の分かち合いの家の中高生が訪問したときの事が韓国でブログになっていた。それを見て関心を持ったそ

「こんなに近くなったのに……」

うだ。

それほど、韓日の距離は近くなったと実感する出来事である。しかし彼女たちも日本入国の際には指紋と顔写真を強制的に採られている。日本に住むある韓国人の友人はそれが嫌で海外出張を断念した。1980年代に本当に、本当に一生懸命になって廃止させた外国人の指紋押捺制度が顔写真採取も含めて簡単に復活してしまった。隣国日本を知りたく、仲良くなりたく、そして「半島と列島」の架け橋にもならんとする隣人を含めてこのような制度が外国人にだけ課せて良いのだろうか。

(お・くあんひょん)

2007年度会計報告

余韻

収入の部		支出の部	
科目	2007 年度決算	科目	2007 年度決算
分担金	2,120,000	会議・活動費	663,785
会費	1,799,000	事業費	4,198,566
寄付・献金	5,371,941	管理費	2,438,147
事業収入	7,929,892	事務・通信費	1,115,243
センター資金より繰入	128,735	印刷費	527,100
雑収入	192,882	雑費	45,081
		人件費	8,554,528
合計	17,542,450	合計	17,542,450

■今年は戦後世界史の中でも特筆すべき「60年」である。西の「イスラエル建国」60年。東の朝鮮半島分断国家成立60年。戦後の世界秩序の方向つけた大きな節目だ。「西」も「東」も権力者は「60周年」を祝うのだろう。しかしこれは人類にとって「恥」の「60年」であることを忘れたくない。この「世界秩序」は在日韓国・朝鮮人社会でも大きな影響を与えた60年でもある。60年前に起こり、戦後の在日朝

鮮人の形成と歴史に大きな影響を与え、まだ解決していない済州島四三事件と民族教育を守ろうとした阪神教育闘争である。私自身もこの「2つの事件」に関わりのある「生」を受けて大阪の生野で生まれ、51年の人生を積み重ねてきた。しかしこのことが私の中で自覚されて、主体的に生きていこうと思ってからまだ20年にもならない。まだまだ私の人生は始まりかも知れない。(ピクアンチャ)

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

- ◇正会費 年額 1口 5,000円
- ◇後援会費 年額 1口 3,000円
 - ・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
- ◇自由献金・クリスマス献金
 - ・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
 - ・銀行振込 三菱東京UFJ銀行 東大阪支店
普通預金 4654965「特定非営利活動法人聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0002

大阪市生野区小路3丁目11番19号

TEL06-6754-4356/FAX06-6224-7869

E-mail: ikuno@nssk.org

http://www.nssk.org/province/ikuno

発行人：宇野 徹

編集人：大橋 襄